

小林 弘: British Museum (Natural History) にある珪藻のタイプスライド
Hiromu KOBAYASI: Diatom type slides in the British Museum (Natural History)

国際植物命名規約の巻頭には、この規約を作るに当たっての6原則がまず挙げられている。その2番目に“分類群の名称の登録は命名タイプによって確定する”とあり、第7条には、命名タイプは正名・異名を問わず、その名称に永久に結合するものであること、命名タイプはその分類群の最も典型的かつ代表的なものである必要はないこと、正タイプ (Holotype) とは命名者が記載を書くのに使用しかつタイプの指定を行った1標本をさし、選定タイプ (Lectotype) とは、正タイプが失われたかまたは指定されていないとき選ばれるもので、同タイプ (Isotype) があるなら同タイプから、同タイプが無いときは等価タイプ (Syntype) から選ぶべきであること、など詳細にわたるタイプについての規定が作られている。これらのことから学名の安定化にとってタイプというものが如何に重要視されているかがわかっていうものである。

しかし、このようにタイプが重要視されてきたのはパリーのコード (1956) からである。第7条の規定もシアトルのコード (1972) までは注として書かれていたが、最新のレニングラードのコード (1978) では項目として登場している。パリーのコードが出たのは26年も前のことになるが、規約が出来たからと言ってすぐさま普及するものではない。珪藻の分野でもタイプを重視し、タイプに基づいて種の吟味がなされるようになったのは、それから10年以上もの年月が経過してからである。私なども Patrick & Reimer の *The Diatoms of the United States* (1966) の中で、いろいろとタイプについての論議が行なわれ、大幅な学名の変更が行なわれているのを見てタイプに目を開いたのであったが、今日ではタイプスライドまたは原試料を調べたら、AはBであったというような論文がずい分と多くなった。これはよい傾向と言わなければならないが、ときには *Navicula viridula* KUETZ. などという慣れ親しんだ種類が突然、今後は *N. lanceolata* (AG.) EHR. の名を持たねばならない、などということになると私のような古参兵はとまどってしまう。

しかし、何んと言っても最後の決め手はタイプである。また、珪藻のようにタイプが壊れやすいガラス製

プレパラートに封入されている場合は貸し出しもむずかしいので、機会があればタイプを見に行きたいと考えていたところ、幸いにも、海外研修の機会にめぐまれたので早速実行に移すことにし、昨年9月21日から11月20日まで British Museum に滞在した。

珪藻の重要な種類の命名者としては、古い順に AGARDH (1809-1832), EHRENBERG (1829-1875), KÜTZING (1833-1849), W. SMITH (1851-1859), GRUNOW (1860-1889) などを挙げることができる。いずれもヨーロッパに集中しているが、一度に全部を見て廻るわけにも行かないので、KÜTZING, W. SMITH などのコレクションのある British Museum を第1候補として選んだわけである。あとは HUSTEDT (1909-1966) のコレクションのある Bremerhaven と EHRENBERG のコレクションのある東ベルリンにそれぞれ10日間滞在したが、今回は最も長かった British Museum について紹介し度いと思う。初めてのことであり、KÜTZING, W. SMITH 以外にも GREGORY や GREVILLE などの著名な Diatomist の手製のプレパラートを目の前にして、多少とも興奮気味であり、また、自分の仕事をこなすことに夢中で博物館の中まで調べる余裕もなかったのも、不完全な紹介になりそうであるが、その点はお許しいただきたい。

まずは受け入れについてであるが、さすがに大英博物館だけのことはあり、私の依頼状のみで、面倒な手続は一切不要、かつ無料であった。行った日は机をもらって、顕微鏡を拡げてきたのであるが、次の日には受付で鍵をもらって部屋に入ると、トランスなども揃えてくれてあって、すぐ仕事ができた。私は使い慣れたものの方がよいと思い顕微鏡だけは持参したが、貸してもくれる。

B.M の Diatom section には部屋が五つあり、それぞれ共通実験室、標本室、客員研究室、PADDOCK 氏の研究室、SIMS 女史の研究室に当てられている。どこも手狭と見え図書は廊下にならんでいる。ちょうど南アフリカから SCHOEMAN 氏が来ていて40日間を同じ部屋で過ごしたが、2人の日課はおよそ次のようである。

朝9時頃やって来て、*Achnanthes minutissima*

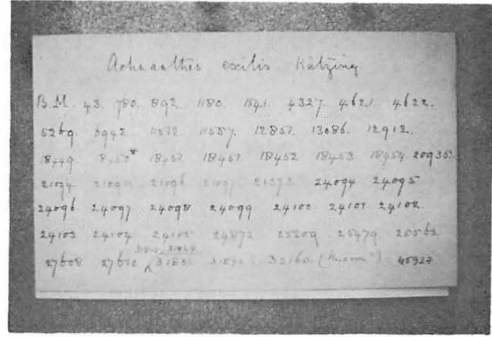
KUETZ., *A. microcephala* KUETZ., *A. exilis* KUETZ. など KÜTZING のタイプを見ることを計画したとしよう。標本室に入って種類別カードを当る(写真1)。これには所蔵のすべてのプレパラート番号が書き込まれていて、たいていは50点以上、多いものでは百点にも及んでいる。ここからタイプを見付け出さなければならない。すでに誰かが調べていてタイプであることを示す赤印が付いている場合はよいが、無い場合は厄介である。廊下の書架から原記載を当り、原産地を調べ、これを頼りに KÜTZING のプレパラートを残らず調べなければならない。同じ産地のプレパラートが何枚もあるような場合は若い試料番号のものに見当を付けて選び出すことも必要となる。私も初めてのことで準備が悪く、いろいろと反省することも多かったが、最も悔まれたのは日本に居るとき何故原産地をちゃんと調べ上げておかなかったかということであった。貴重な時間をずい分と無駄に使ってしまった。

B.M. には、約70,000枚のプレパラートが集めた順に、年代に関係なく、プレパラート戸棚に収納されている。引き出しを引き出すと、プレパラートが平面に並んでいて、一度に50枚ほどのラベルが見渡せるので、目的のものを捜すのには便利であるが、何分にも数が多いので、KÜTZING のプレパラートはこのタンスのこのあたりという見当が付くまでに何日かかかったように思う(写真2)。

選んだプレパラートを障子に並べて部屋に持ち込み、あとは検鏡しながら必要なものは写真に写すということになる。KÜTZING のもの(写真3)は試料を購入して、誰かがそれをプレパラートにしたものらしく、中にはそれらしきものが見当らなかったり、また、くま無く捜してやっと1個見付かったというような場合もあり、骨が折れた。W. SMITH のプレパラートでは、ダイヤモンドペンで W.S. のサインと図の番号が書き込まれているものがあり、氏の *Synopsis of the British Diatomaceae* の図番号と一致していて、図と同じ個体が現れたのには驚いてしまった。しかし、カバーガラスが厚く、たいていは $\times 40$ の対物レンズしか使えなかったのは何とも残念であった。

W. SMITH に限らず、その他のものも一般にカバーガラスが厚いので作業距離の短いアポクロマート $\times 100$ などという油浸レンズは役に立たない。私もそこまでは思い及ばなかったが、ニコンのフルオリート $\times 70$ という油浸を持って行って本当によかったと思っている。ほとんどこのレンズ専用に使ってきた。

写したフィルムは無料で現像もしてもらえらるが、暗



と言うわけで、フィルムはホテルのバスルームでタンク現象をすることにしたが、この時間の少ない点が最も考えに入れておかねばならないことも知れない。

以下は B.M. にあるコレクションのリストである。括弧内の Ex. は市販されたプレパラートであることを示し、また数字はプレパラートの枚数を示す。ご参考になれば幸である。

ADAMS (別箱), BARKER (2839), BASTOW (別箱), BATTERS (62), BAWERBANK (105), CASTRACANE (910), CHALLENGER (?), CHOLNOKY (351), CLEVE and MÖLLER (Ex. 324), COMBER (2992),

DEBY (12360), DELOGNE (99), DICKIE (1068), ELTON (41), FERGUSON (796), FRASER (143), GILL (279), GREGORY (1433), GREVILLE (5248), JOB (323), KITTON (25), KÜTZING (1632), NORMAN (150), O'MEARA (194), PAYNE (8637), PERAGALLO (Ex. 661), POLUNIN (30), RALFS (1323), ROPER (3593), ROSS (186), RYLANDS (Ex. GREGORY 493) (incl. NORMAN 5637), SAXTON (3643), H.L. SMITH (Ex. 749), W. SMITH (1500), SOWERBANK (105), STURT (1710), TULK (1953), VAN HEURCK (Ex. 549). (東学大・生物教室)

— 学 会 録 事 —

1. 持ち廻り評議員会 昭和57年7月1日

次期(昭和58・59年度)会長候補者推薦の件で審議が行われた。その結果、評議員会では、岩本康三(東水大・水産)、阪井與志雄(北大・理)、正置富太郎(北大・水産)の三氏を次期会長候補者として推挙した。

2. 昭和58・59年度会長および評議員選挙

評議員会から推薦された候補者を参考にして会長と評議員の選挙が実施された。8月20日に投票用紙・選挙人名簿を発送し、9月16日に吉崎誠氏(東邦大・理)、高橋正征氏(筑波大・生)立会のもとに開票が行われ、次の方々を次期会長および評議員に選出された。

会長 岩本康三

評議員

北海道地区 山本弘敏・阪井與志雄

東北地区 秋山和夫

関東地区 千原光雄・有賀祐勝・堀 輝三・

市村輝宜・西澤一俊

中部地区 谷口森俊・岩井寿夫

近畿地区 梅崎 勇・巖佐耕三

中国・四国地区 秋山 優・月館潤一

九州地区 奥田武男・野沢治治

3. 講演会・懇親会

昭和57年9月28日(17:30~20:30)、日本植物学会第47回百周年記念大会(東京、国立教育会館)の関連集会として、講演会・懇親会が開催された。加藤季大氏(都立大・理・牧野標本館)の司会で、千原光雄会長の挨拶から始まり、小林弘氏(東学大・教育・生

物)「ヨーロッパの珪藻のタイプ標本について」と原慶明氏(筑波大学・生物科学系)「ケンブリッジ・カルチャー・センターを訪問して」の講演が行われた。

懇親会は司会を大島海一氏(日大・農獣医・教養)と交替し、なごやかに催された。参加者は以下に示す72名で、年々増える傾向にある。講演会・懇親会の開催にあたり、準備と運営には、国立科学博物館植物研究部の金井弘夫氏と日本大学農獣医学部教養の大島海一氏にご尽力いただいた。記して厚く御礼申し上げる。

参加者

秋山 優、鯉坂哲朗、有賀祐勝、安藤一男、飯間雅文、井浦宏司、石川依久子、石光真由美、出井雅彦、糸野洋、巖佐耕三、榎本幸人、大島海一、大谷修司、大葉英雄、大房 剛、大森長朗、岡崎恵視、奥田一雄、長田敬五、加藤季大、川井浩史、熊野 茂、黒木宗尚、高原隆明、小林秀明、小林 弘、阪井與志雄、嵯峨直恒、猿渡厚史、清水 哲、須永 智、瀬戸良三、造力武彦、高橋永治、高畑尚弘、館脇正和、田中次郎、田中美智子、千原光雄、坪 由宏、中野武登、中村義輝、長島秀行、南雲 保、西澤一俊、野崎久義、橋田順子、原 成光、原 慶明、平山知子、福田育二郎、舟橋説往、堀 輝三、堀口健雄、正置富太郎、松江和則、真山茂樹、丸山 晃、三浦昭雄、水沢政雄、水野 真、宮里禮美子、本村泰三、山岸高旺、山根一哲、山本鏡子、横浜康継、吉崎 誠、吉武佐紀子、吉田 稔、Larry LIDDLE.

新入会